学園天使
School Angels Twin Safety
ツインセーフティ
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～
森山水道
挿絵：洗面ぎゅ子
試し読み版
18
未満
二次元ドリームノベルズ

物紹介

桃園(ももぞの)ももか

元気が取り柄でちょっとアホの子なC学園の女生徒。
身体つきはムチムチだが発言内容と可愛い顔立ちのせいで子どもっぽく見られることがコンプレックス。

ピンク・セーフティ

C学園を守る変身ヒロイン、「学園天使 ツイン・セーフティ」のキュートな元気担当。
正体は桃園ももかだが学園の生徒たちには秘密にしている。

狗勒統(くろくすべる)

悪の怪人ブラックタイラントに変身し、人間をしもべに変える能力でツイン・セーフティの籠絡とC学園の支配を目論む金持ちでマッチョな男子生徒。

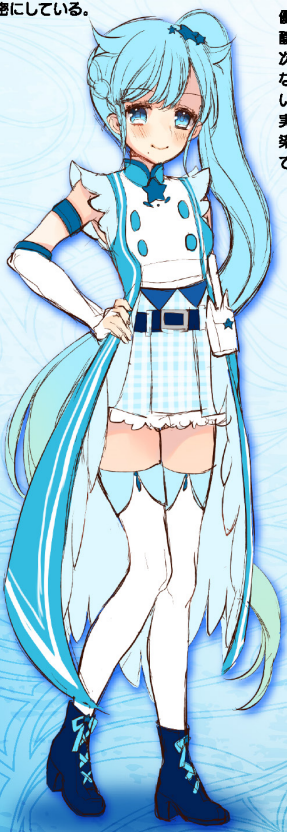
登場人

ブルー・セーフティ

C学園を守る変身ヒロイン、
「学園天使 ツイン・セーフティ」の
煌めく英知担当。
正体は青葉さやかだが学園の生
徒たちには秘密にしている。

青葉さやか（あおば）

優しく大人っぽい雰囲気を
醸し出すC学園の女生徒。
次期生徒会長候補の筆頭に
なれるほどの知性と頼りが
いの持ち主。
実はみんなには内緒で幼馴
染みの火野秀一と付き合っ
ている。



紫苑良子（しおんりょうこ）

C学園の教師で人妻……なのだが半年前に狗勒統に寝取られ、今や彼にベタボレな通い
妻となっている。

第一話
始まる最終作戦!
JK学園天使コンビvs.悪のDK怪人
005

第二話
ヤリチンDK怪人と
女教師の悪の結団式!
037

第三話
ピンク・セーフティが性に目覚める!
男子達への淫らな救出活動
059

第四話
ブルー・セーフティと恋人の絆を完全破壊!
汚い大人の調教快楽
159

最終話
卑劣な寝取り調教作戦の果て!
悪のハーレムが打ち砕く希望の心
291

エピローグ
403

第1話

始まる最終作戦！
JK学園天使コンビ
vs.
悪のDK怪人

1

K県T市のC学園に、生徒が続々と登校している。
初夏の月曜日の空は清々しく晴れ渡っていた。
「クク……今日こそ学園も、変身ヒロインコンビも、しもべに変えて支配してやる」
学園の敷地は、南側に三階建ての校舎。
その正面に野球もサッカーも陸上競技も同時にできる広いグラウンド。
さらにその向こうに正門という配置であった。
含み笑いする人物は、校舎の屋上で腕を組み、偉そうにふんぞり返っている。
「まずはこの青空だ。オレの大好きな黒に染まるがいい！」
彼は学園の男子生徒で、名前は狗勒統（くろくすべる）という。
スキンヘッドの厳つい顔に、目元を隠す金属の黒いマスクをつけている。
見事に日焼けし、ボディビルダーみたいに大きく逞（たくま）しい逆三角の肉体を、夏の制服に窮屈に押し込めていた。
半袖ワイシャツはノースリーブになるまで腕まくりしている。
彼は獲物を見つけたという所作で、眼下の生徒に目を付けた。それは、
「はぁ……」

グラウンドを横切る生徒の人混みで、憂鬱にため息をつく男子生徒だった。
肩を落として俯いて、中肉中背の身体を引きずるように歩いている。
「見つけたぞ」
マスクの怪人物こと狗勒統は、外見以上にどう猛な笑みを浮かべる。
他の誰にも見えないが、常人とは違う彼には、ハッキリ見えていた。
陰気な男子は黒いオーラを纏(まと)っている。
それは彼が抱える、苦しみ、悲しみ、不安、絶望といった感情の発露なのだ。
「さあ、オレの黒き糧となり、支配者とあがめるしもべになれ……スレイブウェーブ！」
丸太じみて節くれ立っている腕を、風を切って突き出した。
バスケットボールも掴める大きな手から、不吉な黒い光が迸(ほとばし)る。
ドス黒い奔流(ほんりゅう)は放たれた矢の勢いで突っ走り、寸分違わず、陰気な男子の胸元に直撃。
「うわあああああああああ！」
哀れな被害者は仰け反って絶叫した。
しかも、
ぐるぐるぐるぐるぐるぐる！
マスクの怪人しか見えない黒いオーラは、彼の放った光線を螺旋状に伝い、怪人の分厚

い胸元に飛び込んだ。
「フハハハハ！　力が漲（みなぎ）る！　溢れる！　タイラント・エスカレーション！」
不穏な黒いオーラを取り込む彼は叫び、オーラの光は一気に膨れあがって爆発した。
ギランッ！
光が雲散霧消すると、そこには、変身を終えた統の姿があった。
筋肉の塊の肉体は腕組みし、白いノースリーブのコートを纏っている。目元のマスクはそのままだが、ツルツル頭に髪が生え、剣山のように鋭く天を衝いていた。
「とうっ！」
彼は跳躍した。屋上の手すりを軽々越えて、標的にした男子学生の元に着地する。
陰気な男子学生は、既に叫ぶのをやめていた。
変身した統が目の前に現れるなり、その場に土下座。乾いた地面に額を擦りつけた。
「ブラックタイラント様、万歳！」
憧れと敬意のこもった大声で迎える。周囲では学生たちが震え上がっていた。
「ま、また出た！」
「人間の嫌な感情を取り込んで、その持ち主をしもべに変えちゃう超強い変態怪人……」
「しかも、自分の物にした嫌な感情を増幅拡散して……」

生存本能も凍えて縮こまる威圧感のせいで、ヘビに睨まれたカエルになっている学生たちに向かって、話題の怪人は振り向きもせずに言い放つ。

「他の凡骨もオレの黒き糧となり、支配者とあがめるしもべになれ！」

彼が宿す黒いオーラが放出された。全身から解き放たれた邪悪なエネルギーの光芒は、四方八方に飛び出して、生徒たちに襲いかかる。

「きゃぁぁぁ！」

「うわぁぁぁぁぁ！」

女子も男子も下級生も上級生も、五十人近くの生徒たちが、なすすべなく餌食となった。

悪のビームを浴びた者はひとり、またひとりと膝をつく。

「「「「ブラックタイラント様、万歳！」」」」

誰もが声高に怪人を称える。それは、彼らが怪人のしもべに堕ちたなによりの証拠だ。

放射状に土下座する学生らを睥睨した怪人は、王者の風格で最初の彼に歩み寄った。

「顔を上げろ」

呼ばれた彼は地面に両手をついたまま顔を上げた。

怪人は腕組みし、見下ろしながら訊ねる。

「どうして落ち込んでいた？」

「先週の金曜日の放課後、告白したらフられました。そのショックで……うぅ」
「土日を挟んでも未だに引きずっているというわけか」
「ただフられたのならまだしも……あの子は……いや、あのビッチは、可愛い顔してるのに憎たらしいことを言ったのです！」
「ほぅ」
「道ばたのゲロを見る目で『うわキモっ。その顔であーしと付き合いたいなんて、ないわー。頭沸いてるわー。近寄らないでよ、ケーサツ呼ぶわよ？』なんて……」
「確かにビッチ……嫌な女だな。で、そいつはこの場にいるか？」
「えと……あ、いました！　斜め右方向の六番目！　茶髪サイドポニーで、パンツ尻出して土下座してる黒ギャルです！」
　怪人は土下座する学生の間を縫ってそちらに行った。
「顔を上げろ、黒ギャルビッチ」
　平伏は怪人への忠誠の証。彼のしもべに堕ちていた話題の女子は、従順に顔を上げた。
「小悪魔といったタイプだな。モテない男が、頼めばヤラせてくれそうと思う感じだ」
「ありがとうございます」
「オレとあいつの会話は聞こえていたな？　事実か？」

「はい」
「あいつはとてもタイプじゃないと？」
「冗談じゃありません」
頬を不快に膨らませる彼女に、怪人は命じた。
「しもべ同士、仲よくやれ。今この時から、お前はあいつのカノジョだ」
「わかりました。あなた様のご命令なら」
「あいつはお前の理想の男だぞ」
「あなた様のご命令なら……あぁ……」
黒ギャルの目が、みるみる熱っぽくなっていく。
彼女の潤み目の中には、こっぴどくフった男子の顔が映っていた。
「あいつの元へ行け。好き合ってる者同士、キスでもセックスでもするがいい」
「はい、ありがとうございます！」
彼女は猛然と駆けだした。男子は立ち上がり、胸に飛び込んできた彼女を抱きしめる。
先ほどまでの悪態が嘘のように、彼の声が歓喜に震えた。
「うあああ！　ほ、ほんとに？　マジでカノジョになってくれるの？」
「もちろん！　あーしはあんたのオンナよ。金曜日は酷いこと言ってほんとメンゴ！」

心から愛する男性にするように、彼女は彼の頬にキスの雨を降らせた。
そこへ怪人が現れる。鼻の下を伸ばす男子に、恩着せがましく言い放つ。
「オレのしもべになったら、こんな望みも叶うのだ」
「はい、ありがとうございます！　しもべとして、誠心誠意お尽くしします！」
「ならば、来週の生徒会長選挙では、オレが言う候補者に票を入れろ。他の者もだ！」
「「「「はははぁ！」」」」
怪人を中心に土下座する、五十人近い生徒たちが、一斉に返事をする。だが、
「ふざけるな！」
「人間の心を操るなんて、許されるわけないわ！」
土下座の輪の外から、非難の声が飛んできた。
怪人が見ると、メガネをかけたハンサムと、スタイルのいい勝ち気そうな女子を中心に、数人の生徒が集まって、強い目を向けている。
「オレの支配から逃れた者がいたか。心に隙のない者……活力や希望に溢れた者には、しもべ化の光波動は効きにくいものだが」
怪人は、思い通りにならなかった者がいても取り乱さない。
「そんな奴らも、その活力や希望を奪われれば……その拠り所となっているものをオレが

破壊し、絶望させれば、例外でなくなる」
腕を組んで仁王立ちする彼にじっと見られても、正気を保つ学生たちは怯まなかった。
「あんたなんか、ツイン・セーフティに絶対に敵わないくせに！」
「学園天使ツイン・セーフティは、いつものようにお前を倒し、皆を正気に戻すぞ！」
気の強そうな女子とメガネの男子が、希望を漲らせながらその名を呼ぶと、彼らは連呼し始めた。
「「「「学園天使ツイン・セーフティ！　学園天使ツイン・セーフティ！　学園天使ツイン・セーフティ！」」」」
期待に満ちた呼び出しコールが響き渡る。
怪人は相変わらず泰然と構えていた。
「呼ぶがいい、現れるがいい。貴様らも、あの生意気なふたりも知らんのだ。これは終わりの始まりで、ふたりの正義のヒロインが、黒きオレのしもべに堕ちる物語の幕開けだと」
彼が不敵に呟いたとき、
「「お待たせ！」」
美しく勇ましい凛声の唱和が、空から降ってきたのであった。

2

騒動が起こる少し前。

「ひーん、土日にやるの忘れたから朝早く来てやってるのに、課題が終わらないよぅ！」

C学園の三階の隅。誰もいない空き教室に、女子の泣き言が木霊する。

課題の問題集と格闘しているのは、童顔で背の低い生徒だった。

彼女は、桃園（ももぞの）ももかという。

背丈の順で並ぶときは小学校から一番前。おまけに、思春期になっても無垢であどけない顔立ちで、セミロングの髪を、ネコのキャラクターのアクセサリーで留め、ツインテールにするのを好むことから、小中学生と間違えられる。だが、彼女の母に言わせれば、

「今もぬいぐるみを抱いて寝るお子ちゃまのくせに、カラダだけはオトナなんだから」

評価は確かだった。チェック柄の赤いリボンがついた、桃色の袖なしカーディガンの胸元は、皺一つなくパンパンで、椅子に腰掛けるお尻も大きい。黒と白のチェックのスカートの中で広く丸く潰れている。血色よく輝く太腿には、若い肉が豊富に詰まっていた。

いわゆるトランジスタグラマーの彼女の横から、励ましの言葉がかけられる。

「頑張って。あと少しじゃない」

隣の席から寄せた椅子に楚々（そそ）と腰掛け、童顔巨乳の友達が書いていく解答の正誤を頭の

中でチェックしているのは、青葉（あおば）さやかだ。

背が高く、半袖のブラウスと爽やかなブルーのノースリーブカーディガンを着て、白いソックスのももかとは対照的に、黒く大人びたハイソックスを愛用している。ももかには、

「背が高くて足が長いし、スタイルも素敵で、すごく可愛い。まるでモデルさんみたい！」

と言われるプロポーションの生徒なのだが、褒めてくれる友人と違い、肉付きは少ない。胸元は二次性徴を拒んでいるみたいに慎ましく、スカートから伸びる脚は長くてなめらかだが、太腿は華奢（きゃしゃ）だった。

抱きしめたら折れてしまいそうな儚（はかな）い身体つきなものの、愛らしい星の髪留めをつけたセミロングの髪は清潔感に溢れ、端整な顔は知的に輝き、それでいて、親しみのある穏やかさを醸し出している。

お陰で、子供っぽいももかと歩いていると、姉どころかママに間違えられることも少なくない。温かい声で励ましてくれる大人っぽい友達に、ももかは力強く約束した。

「頑張る！」

「あ、そこの式。代入する数字が間違ってる。5じゃなくて6だよ」

「のああ！　走り書きしてるから見間違えた！」

「焦らないで。丁寧に書いても必ずＨＲ前に終わるわ。急いだ方が時間をロスしちゃう」

「うん。さやかちゃんの言う通り、焦らないで丁寧に書くよ」
ももかは顔を上げずに約束し、ネコのキャラクターつきのシャーペンを動かす。
その声は「必ずHR前に終わる」という言葉を信じ切っていた。
「生徒会長選挙で忙しいのに、課題を見てもらってごめんね」
「ううん。他の人の勉強を見るのは、復習になるの。自分のためでもあるから」
「学年で一番頭のいいさやかちゃんに見てもらえるなんて、おバカなわたしは心強いよ」
「そんな……褒めなくていいんだよ……ももかちゃんは、ちゃんとやれてるじゃない」
卑下する友達を褒めるさやかの大人びた顔は、照れた子供みたいに赤らんでいた。
「放課後、選挙運動の手伝い、絶対にするね！」
「ありがとう、ももかちゃん」
間違ったら「さやかちゃんが教えてくれる」と安心しきって、必死に頭をフル回転させたももかは、ほどなく課題を終わらせたが、
「やった！　さやかちゃんの言う通り、HR前に終わったよ！」
ぐぅ〜〜〜〜。
シャーペンを動かすのと連動し、ゆっさゆっさ揺れていた胸元の下のすっきりしたお腹が盛大に鳴った。

「あうぅ……朝から頭を使ったら、お腹空いちゃったぁ……コンビニでパンでも……そうだ、さやかちゃんもなにか食べる？　お礼におごるよ。もちろん、放課後は手伝うね」

黒板の上の掛け時計で時間に余裕があるのを確認し、空きっ腹の子供の声で言ったとき、

「よかったら食べて」

お腹が鳴るのを聞くや自分の鞄を開けたさやかが、ハンカチの包みを取り出した。

片付けられていない問題集の上にそっと置き、白魚のような指で丁寧に開ける。

「うわぁ！　これって、サンドイッチのお弁当！」

白く格子状でプラスチック製の弁当箱が、サランラップにくるまれている。中には半分に切った耳のない食パンが並んでいた。

ハムにレタス、ツブツブも鮮やかな赤いジャム、平たいメンチカツ。頭のいい美人女子校生の手で調理され、白いパンに挟まって、食べられるのを行儀よく待っている。

「……ゴクッ……い、いいの？」

「コンビニに行っても、混んでたら時間がかかるでしょ？　遅刻しないまでも、食べる時間がなくて、お腹が空いたまま、一時間目を受けることになるかも知れないもの」

「で、でも……これってさやかちゃんのランチじゃ……受け取れないよぉ」

食いしん坊は今にもむしゃぶりつきそうな顔で、食欲と分別が葛藤する声を絞り出す。

さやかは鞄から新しい包みを取り出し、広げてみせる。
「あ！」
「この通り、私のランチはちゃんとあるわ。それはしゅ……」
「しゅ？」
「しゅ、終了宣言せずに諦めないで、課題をちゃんとやったももかちゃん用なのよ」
「え、そうなの！　じゃ、じゃあ！」
「めしあがれ」
「ありがとう！　さやかちゃん、大好き！」
童顔の大きな目が、宝石みたいに輝いた。
よく考えなくても辻褄がぜんぜん合っていないのだが、考えるよりも先に手が出るタイプな上に、空腹のせいで食欲の塊になっているももかは、さやかの言葉を素直に信じた。
（ほんとは秀一（しゅういち）くんに渡して、一緒にランチするつもりだったのだけれど）
さやかは恋人の顔を思い浮かべて、心でぼやく。
だが、後悔はない。
（空腹の友達を放っておけないもの。それに、ももかちゃんは、料理を本当に美味しそうに食べてくれる。私は、それを見るのが大好き。見ていると、元気になっちゃう）

優しい笑顔で、猛烈な勢いで両手を伸ばすももかを眺める。と、ドォン！

校庭で黒い光が噴き上がった。

「これって！」

さやかが血相を変えて窓に駆け寄った。

そこには、コートの怪人を中心に、大勢の生徒が土下座する異様な光景が広がっている。

「大変！　ももかちゃん、行こ！」

「ほごっ！　……んぐんぐ……ゴクンッ、うん！」

ランチボックスのサンドイッチをまとめてひっつかむなり、大口を開けて詰め込んで、慌てて隣に並んだももかは、あっという間に咀嚼嚥下（そしゃくえんげ）。

「すごく美味しかったよ、さやかちゃん！　ご馳走様！」

流石（さすが）に目を丸くしたさやかだったが、清々しい食べっぷりに相好を崩した。

「どういたしまして、ももかちゃん」

ふたりで無人の廊下を急ぎ、階段を駆け上がり、屋上に躍り出る。

奇しくも、怪人こと狗勒統も立った場所に来ると、頷き合った。

「「メイクアップ、スクールエンジェル！」」

スカートのポケットから変身アイテムのスマホを取り出し、怪人の蹂躙の開始と共に黒く濁った空に向かって、勢いよく掲げた。

ピカァァァ！

ももかのスマホからは桃色の、さやかのからは青い光線が迸った。

それぞれに巻き付き、丸い繭となり、ふたりの姿を隠す。

しかし、それも一瞬だった。光は弾け、変身したふたりの新しい姿が現れる。

変身後のももかが纏うのは、

「純真無垢なアイドルを思わせる、ワンピースドレス」

だった。変身して一段と量感が増し、パツンパツンに張り詰めているコットン質の胸元は白く、中央には、赤いハートのリボンがついている。健康的に括れたウエストは、赤いリボンがクロスする白地のコルセットに包まれていた。そのフロントには赤い大きなリボンがついていて、可愛らしさをいっそう引き立てている。

下で傘のように広がるのは、ティアード・スカートめいた、桃色の段々ボトムだ。耳を立てたネコみたいな白いスマホケースが脇につき、裾は白いフリルでいっぱいだった。

スカートの端からは瑞々しい太腿が伸びている。

膝から下は、コルセットと同じデザインで、白地に赤いリボンが複数クロスしているブ

ーツを履いており、両手にはシルク質でスベスベの、白い指ぬき手袋をはめていた。
様変わりした彼女だが、変身で変化したのは、被服だけではない。
愛らしいツインテールの桃色の髪はゆるく長いうねりを帯び、ふくらはぎに達していた。
頭頂に現れた赤いリボンも手伝って、純真無垢な彼女の魅力が、いっそう強調されている。
もしもマイクを持ったなら、
「友達感覚の身近なアイドル」
などと誰でも思うタイプであり、実際に男女両方に好かれている、学園の変身ヒロインアイドルだった。
一方、変身前は大人びた雰囲気のさやかの変身姿は、
「知的で優しい美人お姉さんヒロイン」
というオーラを醸し出している。
適度にぴっちりした白いベストを着込み、黒くストイックなベルトで儚げなウエストを引き締め、青と白のチェック柄のスカートをゆったりなびかせ、その脇には、パートナーと同じスマホケースを下げていた。
一番上には、フロントが大きく開いていて、裾が足下まで伸びている、ブルーのノースリーブコートを纏っているのだが、これが瀟洒な雰囲気を強めている。

変身しても太腿はほっそりしていた。白いニーハイソックスに包まれ、紐は青い黒ブーツを履いている美脚は、変身前よりも長くしなやかだ。両腕には、肘まで来る白い指ぬきロンググローブが圧着している。

さやかはパートナーと同じで、被服以外も変わっていた。

清潔感漂うセミロングの髪は、サイドポニーになっている。可愛らしい星の髪留めの先から穏やかにうねるその毛先は、踝にまで達していた。

元気で親しみのあるピンク同様、穏やかで清楚なブルーも男女問わず好かれている。

初めて悪の怪人が現れたとき、白いコートにサングラスという謎の女性に、変身アイテムを託されたのだが、学園の平和を乱す怪人を倒すためだけに力を使いたい彼女らは、日常生活を満足に送れなくなるリスクを避ける理由で、今日も人目を忍んで変身したのだ。

「タイラントをやっつけよう、ブルー！」

「皆を守りましょう、ピンク！」

手を繋いで屋上の柵を跳び越えたとき、正気を保つ生徒たちの自分らを呼ぶ声が聞こえてきた。

だからふたりは降り立つなり、

「「お待たせ！」」

と、元気づける声で安心させた。
「キュートなハートのみんなの元気、ピンク・セーフティ！」
「煌めく星のみんなの英知、ブルー・セーフティ！」
「「学園天使、ツイン・セーフティ！」」
ふたりで名乗って見得を切る。
元気いっぱいのピンクは、長いツインテールとフリルのスカートを、清廉なブルーは、ゆるく波打つサイドポニーと頼もしいコートをふわりとなびかせ、怪人と対峙した。
わああああああああああああああ！
登場を待ちわびていた学生たちの歓声は、黒く淀んだ空に轟いた。
「来たか、あばずれども」
傲然と佇んでいた怪人は、腕組みを解いて不敵に口角を上げる。
そんな怪人に意識が向いている正義のヒロインたちは気付かなかった。
ジィィィィ……。
ふたりが飛び出した屋上の物陰から、何者かが現れたのを。
その誰かはコンクリートの床に這って姿を隠しつつ、デジタルカメラを向けているのを。

十人十色だが、反り返る勢いや、汗と体臭の混じった牡臭さは、どれも勝るとも劣らない。みんな、ピンクに性欲を処理させたくてうずうずして、激しくビクついている。
「ふわぁ、みんな、すごく力強く勃起してるよぉ……男の人の匂いがすごく濃く立ちこめてるぅ……なんだか、変な気分になってきちゃった」
良子が話しかけてきた。信頼を悪用し、歪んだ性教育をする悪の女教師は、
「大勢の男の子の勃起おチンポを突きつけられて、興奮してるのねピンクさん。ますますオトナっぽくなって、先生嬉しいわ」
「ピンク、オトナっぽいですか？」
「もちろんよ。おチンポに堪らない気持ちになっているのは、顔を見ればすぐわかるわ。そんな風には、子供はならないわね」
「嬉しい……ピンク、またオトナっぽくなってるんだ」
ピンクの頬が喜びで上気する。
オーガズム後の気分のよさが手伝って、すっかり良子の口車に乗ってしまう。
悪の性教育は着実に彼女を染めていた。慣れた様子で自分をピンクと呼ぶのも、成果のひとつなのだ。術中に嵌まっている彼女に良子は、
「ピンクさん。みんながおチンポを出してくれたのは、恥ずかしさをかなぐり捨てて、あ

なたの救出活動に協力するためよ」

男子たちを代弁しつつ、淫靡な深みへまたもやピンクを誘導する。

「エッチで可愛い、みんなのアイドルのあなたが、色男くんに奪われそうになって、ようやく素直になってくれたわ。そんなことは断固阻止して、自分もヌいてもらいたいと思っているの。オトナのピンクさんなら、こういうとき、どうすればいいかわかるわよね」

「うん、先生」

ピンクは男子たちにハッキリ言った。

「みんな、ピンクに射精のお手伝いをさせてくれて、本当にありがとう！　頑張るね！」

いつも見せる、元気で魅力的な笑顔を向ける。

しかしすぐに、困った顔をした。

「でも、ひとりずつにしてくれる？　こんなに大勢を一度には……」

「ダメよ、ピンクさん。だって、残り時間は三十五分。ふたりをヌいてあげるのに、二十五分もかかったのよ？　一度に全員の相手をしなければ、とても間に合わないわ」

「あ、そうか……うぅ……でも、こんなに大勢となんて……なんだか怖いよぉ」

ピンクが眉根を寄せる。

しかし、すぐに決意に満ちた目になった。

「でも、ピンクは学園天使だもん。ここで頑張らなかったら、オトナじゃないわよ」
男子たちは歓声を上げた。
「それでこそ、おれたちのピンクだ！」
「んじゃ、お口も～らいっと」
「九十三センチFカップオッパイでパイズリしてくれよ、ピンク！」
「白くて可愛くて、シルクみたいにスベスベしそうな手袋の手で、扱いて！」
たちまち殺到し、思い思いに勃起を当てる。
お口に太く短いのがねじ込まれた。狙われたオッパイには、ユウト並みに色っぽい巨根が収まる。ツトム位の標準程度の肉棒を掴まされ、シルク質の手袋の両手が塞がった。
あぶれた男子もいるが、もう、傍観者ではいない。パツンパツンに膨らんだ横乳に、硬い亀頭の先が無数に突き刺さる。可愛いコスチュームの可憐で優しいコットン質のリボンやフリルのスカート、ふわりとうねるツインテールのピンクの髪なども、怒張のオナホール扱いされた。彼らは勃起をくるむなり、鼻息荒く扱きだす。
「んぷ……じゅるる……んんん……ふああ……すごいことになってるよぉ」
生まれて初めてのフェラチオ相手になったツトムにしたように、口腔を締めて粘膜で絞り、勃起を扱いてあげながら、ピンクが困った声で呟く。

全身に男子の存在感を覚える。

口の中はもちろん、手を重ねて扱かされるスベスベ手袋の両手からも、谷間の底でピストン運動されると同時に、先走り汁でヌルつく亀頭に横乳の膨らみをしきりに突かれたり、擦られたりするオッパイからも、勃起に絡んだ髪やコスチュームからも、男子の荒々しい欲望と精力の律動が伝わってくる。

「まるで、おチンポで全身を愛撫されてるみたい……じゅぼぼ……じゅぶっ」

呟いたとき、良子が諌めてきた。

「こら、ピンクさん。初めてたくさんの男の子の相手をするから戸惑ってしまうのは仕方がないことだけど、それではダメよ。気をしっかり持って」

「う、うん……じゅぶじゅぶっ……んく……」

「先生が教えてきたことを思い出して。救出活動や、おチンポの性欲処理をさせてくれる男の子たちに感謝して、その気持ちを言葉で伝えるの。自分がどんなことをしてもらって、どんな風に感じているのか言うのも、忘れてはダメよ」

良子の教えにハッとして、ピンクは早速実行した。

「そうだった……んっ……みんな、聞いてぇ……んも、んも」

律儀にフェラチオし、両手で扱いて、オッパイと擦れる性感が上がるように身体を上下

に揺すって、男子たちの劣情を積極的に受け入れてあげながら、
「ピンクの身体を、おチンポ射精するのに使ってくれて、本当にありがとうっ」
心からの感謝を込めてお礼を言う。
「ピンクのお口に絞られて、じゅぼじゅぼ扱かれてるおチンポも、はあ、はあ、オッパイに包まれて、隅々まで擦れてるおチンポも、あン、横からオッパイを突いたり、恥ずかしく勃起した乳輪と乳首をコリコリってしてくれるおチンポも、はああ、手袋にシュッシュされてるおチンポも、コスチュームやリボンや髪を巻いてシコシコしてくれてるおチンポも、みんなみんな、元気になってるのぉ」
甘く声を震えさせて伝える。
「元気いっぱいにビクビク震えて、火傷(やけど)しちゃいそうなほど熱くなって脈動して、芯に鉄の棒が入ってるみたいに硬くなって、あぁン、お口の中や、オッパイの内と外や、んんっ、乳首と乳輪にも、コスチュームやリボンや髪にも、先走りのお汁を遠慮なくひっかけてくれて、ピンクのカラダが気持ちいいって教えてくれて、ピンクはとっても嬉しいよぉ」
ピンクのカラダの揺れが速くなっていく。
ツインテールの柔らかい髪がふわりふわりとなびき、アイドルみたいなコスチュームが淫靡に揺れて、露出する乳房や他の柔肌がフルフル可愛く波打つ。それら、変身ヒロイン

の愛らしい肢体は、今やどこもかしこも男子たちそれぞれの好み――フェティシズムの標的にされて、先走り汁が染みこみ、ほのかに青臭く汗臭くなりながら、照り光っている。

「あのね、ピンク、すごくドキドキしてるの、はあ、はあ、最初は、こんなに大勢の男の子とエッチな救出活動をすることになって驚いたけど、みんなを悪の手から救いたいし、ピンクのカラダでおチンポ気持ちよくなりたいって思ってくれたのに感謝したいって思って、勇気を出してやってみたら……んんっ……ピンクも気持ちよくなっちゃってるの」

男子たちの目がギラギラ光る。

多数の勃起にたかられているのに積極的に受け入れて、しかも感じている変身ヒロインの倒錯的な魅力に、ますます肉棒が漲った。溢れ始めた白い先走り汁を、ピンクの肌やコスチュームに躍起になって塗りつけ、退廃的な性欲処理と歪んだ愛情表現に没頭する。

「お口の粘膜と唇も、オッパイの内と外と乳輪と乳首も、はあっ、はあっ、白い手袋のお手々も、髪と繋がる頭も、コスチュームと続いてる肌も、全部気持ちよく痺れて、ああン、ゾクゾクしてるのぉ」

全身を包む愉悦に、ピンクは自然に笑みをこぼす。

しかし、それは色気に満ちていた。

普段の元気で無垢な笑顔ではなくなり、性欲の充足を悦ぶメスのオーラを纏っていて、

「んんっ……じゅぶぶ……はあっ、はあっ……んんっ……ピンクは、みんなと絶頂したい気分なのぉ」
女子にも好かれる、マスコット的な可愛い声は、男子の劣情をいやでも刺激する妖しい気配を帯びていた。
「変身ヒロインは、戦ってみんなを守る格好いいオトナのすることなのに、はああ、みんなを助けたり、おチンポを向けてくれた感謝の気持ちを表したりするためとはいえ、こんなエッチなことをして、しかも感じて、積極的に絶頂したがるなんておかしいのはわかってるけど、ああン、みんなに射精してもらいながら、絶頂快楽を味わいたいのォ」
男子たちは興奮も露わに叫ぶ。
「こんなに可愛い変身ヒロインが、俺たちと一緒にイキたいって思ってくれてる！」
「ああ、マジ可愛い！　ピンクはマジエロ学園大天使だ！　もちろん、一緒にイこうぜ！」
「思い切り射精するから、ピンクもイッてよ！」
「うああっ、オナニー同然なのに、彼女のマンコにハメるよりも遥かに気持ちいい！」
「恋人がいても関係ない！　ピンクのカラダに、あいつとヤるときより大量に出すよ！」
「ピンクと比べたら、ヤらせてくれない彼女なんてドブスだ！　ピンク愛してるぜぇ！」
自分の好きな場所と、眉目の端が下がったピンクの蕩け顔を視界に収め、それらの様子

と、触れている場所の感触を存分に楽しみながら、射精に向かって分身を扱き、あるいは彼女の柔肌やコスチュームに突き立てる。そんな彼らをピンクは叱った。

「恋人は大事にしなくちゃダメだよぉ、んんんっ、ピンクはみんなを助けたり、ピンクのカラダでおチンポ射精したくなってくれたりすることに感謝したり、そうしてみんなと一緒に絶頂したいだけなんだからぁ、ハア、ハア、ピンクを褒めてくれるのは嬉しいけど、恋人を悪く言うなんて、悲しくなっちゃう」

説得力ゼロの悶え顔で諌めるが、男子たちは、

「くぅっ、流石は正義のヒロイン、こんなときにも思いやりがある。そこに興奮する！」

「でもさピンク」

「健気なことを言っても、カラダをエロく揺すってるじゃん」

「おしゃぶりしながら下品に唇をめくらせてる顔は、汗かいてエロ可愛く赤くなってる」

「へへへ、そんなに俺たちとイキたいのかよ」

「真面目な話は後にして、俺たちと一緒に気持ちいい思いしようぜ」

「そうそう。みんなでイこうぜ。男に囲まれてイク姿を、見せてくれよ」

灼熱の性感の塊に変わり、今にも射精しそうな勃起ペニスでラストスパートをかける。

反省するどころか、性行為の最中に正論を言うピンクのギャップにますます興奮して、

肉棒を扱き、あるいは彼女のカラダやコスチュームに擦りつける。
「あぁン、ほんとうに、悪口やケンカはダメなんだからね？　あっ、ンンン、ぜ、絶頂しそう、はぅぅ、ピンクもみんなのおチンポと一緒に、また絶頂しそうだよぉ」
　すると、異常な性行為の魔性にどんどん魅入られていくピンクの様子に、それを望むご主人様の命令通りに誘導できた達成感を覚え、死角からニヤニヤ見ていた良子が、さらに悪辣な性教育を行う。
「ピンクさん。絶頂と言うのは味気ないわ。男の子たちのように、イク、と表現して。そうすると、みんなはもっと悦ぶわよ」
　正義のヒロインに相応しくない卑語を教えられたピンクは、
「うん、先生、ハア、ハア、みんなのおチンポの性欲のはけ口にされて、ピンクはイキそうなの、んんんっ、ピンクは、おチンポみんなとイキたいのぉ、はああ、んふぅぅ、一緒に、イこうよぉ」
「その調子よピンクさん。次は、みんなの精液をピンクにかけて、よ。そうされるのは、おチンポ射精のお手伝いをせがまれるのと同じ位、ピンクさんみたいなオトナの女にとっては名誉なことであり、おチンポに対する最高の感謝表現のひとつなんだから」
「ピンクはオトナの女……オトナの感謝の表現……わかったよ、先生」

「流石はオトナのピンクさん。わかってくれたところで、さ、みんなにおねだりして」
「うん、先生……みんな、あのね。ピンクのカラダに、いっぱい精液かけてね」
カラダを揺すりたて、コスチュームの肢体を微細にくねらせて勃起と擦れる性感を上げ、
「じゅぼじゅぼ下品な音を立てておチンポしゃぶってるお口の中に射精して飲ませて、はあっ、んんっ、オッパイの肌にも、恥ずかしく勃起した乳輪と乳首にも、ドビュドビュッてして、ああ、んふぅ、他のところの肌にも、髪にもコスチュームにも、好きなところに熱くて濃くて匂いのキツイおチンポ汁をひっかけて、みんなで気持ちよくなろっ」
全身に密着するペニスを利用しオナニーじみたことをして、皆と息を合わせて甘美を貪り、オーガズムを目指しながら、
「みんなのおチンポと精液の中で、ピンクもイキたいのぉ、ああ、くふぅン、ピンク、イっちゃうぅ、ンン、みんなのおチンポがすごくビクビクして、今にもイキそうなように、ピンクもカラダが火照って、気持ちよくなりすぎて、もう、イッちゃいそうだよぉ」
正義のヒロインのくせに、今にもイキそうなのを隠しもせず、それどころか、同時絶頂をせがんでくるピンクに、男子たちは大興奮。
「うあああ、エロ可愛い学園大天使ピンクに、童貞ザーメンぶっかける！」
「おおっ、チンポ気持ちよすぎるっ、彼女とのセックスよりも遥かに精液出るぞこりゃ！」

必死に腰を振り、あるいは利き手で勃起を扱いて、ほとんど同時に上り詰めた。
ブビュグゥゥゥウ！　ドビュゥ！　ドビュブブブ！　ドブググゥゥ！　ブビュッ！　ブビュブブブ！　ドグルルルル！　ブビュッブビュルルッ！　ドビュルルルルル！
既に黒いオーラを排泄したツトムとユウトも加わって、総出でピンクの肢体に群がっていた十人以上の男子たちが、一斉に大放出。
熱い性感の塊になっていた分身から、濃縮精液を飛ばす。若いピンクの柔らかくて瑞々しい女体、コットンめいたコスチューム、シルク質の手袋それぞれの肌触りや、いやらしい実況で、ヨーグルトみたいにネバネバになった牡粘液は、尿道を広げながら駆け抜ける。
目が眩み、自分の身体の輪郭がぼやけ、体重がなくなり浮き上がる錯覚を伴う、途方もない快楽を性器の持ち主に味わわせながら、元気で健気な変身ヒロインに襲いかかる。
「うおおお、飲めよピンク！　イキながらチンポ精液全部飲め！」
「正義のヒロインの九十三センチFカップ爆乳に、おれのチンポ汁ぶっかけ！」
「おれらのを浴びて、全身ザーメン臭くなって、もっとエロ可愛くなってよピンク！」
男子校生は全員、憧れる正義のヒロインに向かって、躍起になって射精する。
思春期のいびつな愛情表現で全身をドロドロにされ、青臭く染められるピンクは、
「あああっ、ピンクイク！　みんなに射精されて、ドビュドビュッて、すごい勢いで熱く

て臭くて重たい精液を全身にかけられる気持ちよさで、ピンクイクよぉ！」

自分と同年代の思春期男子の新鮮な濃厚精液にまみれながら、絶頂へ翔んだ。

パイズリのときよりも一段深く濃密で、男子たちみたいに目の前が真っ白になり、耳がキーンと遠くなってしまい、自分の輪郭がなくなりそうな錯覚に陥る愉悦に浸った。

「ハア、ハア、ピンク、イッてるのぉ！　みんなと一緒にイクの気持ちいいから大好きぃ」

眉根の寄る悶え顔で、咥えるペニスと下唇の間から舌を出し、しきりに熱い呼気を吐く。

元気で愛らしい顔には、淫靡な色気のオーラが纏わり付き、全身がブルブル震えている。

白濁のまだら模様がついたキュートなツインテールは小刻みに揺れ、ヨーグルトめいた水玉模様を加えたコスチュームは微風に煽られたみたいに小さく震え、かけられた精液が伝って白い跡がついた爆乳や太腿の柔肌に、振動の波紋が広がった。

「よかったなピンク。男子どもの黒いオーラは、すべて排泄されたぞ」

胡座をかいて彼女をM字開脚で座らせている怪人が、含み笑いをする。

彼にしてみれば敗北同然。彼らを永遠のしもべにする作戦が、ピンクに打ち砕かれたはずなのに、悔しがる様子も、慌てる様子もない。

それも当然だった。なぜなら、彼の作戦の真骨頂は、これからなのだから。

7

「はあ……はあ……や……やったよ……！」

C学園の裏庭は、ラブホテルすら凌駕（りょうが）する、淫靡な空気に満ちていた。

芝の青臭さは、十人強の思春期男子が同時に放った、生臭いザーメンの匂いに上塗りされている。さらには、男子とピンクの汗と体臭の臭いも混ざり、立ちこめていた。

「みんなを助けられたよ！」

彼ら全員を射精に導いたピンクの顔が輝いた。

「みんなのおチンポから、怪人が注いだ黒いオーラがなくなってるのがハッキリ見えるの。もう、あいつのしもべにならないんだよっ」

射精するだけ射精すると、芝の上で満足そうに大の字になり、ぜえぜえ息を荒らげている男子たちへ叫ぶ。

皆を救うために奮闘した彼女は大喜びだが、気付いていない。

射精の的になり、全身が精液でドロドロになっていたというのに、今は汁はどこにもない。あとで怪人が語るように、これもピンクをしもべに堕とす策略の一環だった。

気付いたところで、もう、取り返しはつかなかったのだが、代わりに彼女は、別の異変に気がついた。

「うんっ、ご主人様」

愛欲には行動を伴うさやかは、大きめに脚を開く。

「ケツマンコの奥にしっかり射精して、たっぷり精液を飲ませてね。さやかは、ご主人様の精液をケツマンコで飲みながらイキたいの。満足とはほど遠い指オナニーで焦れているスケベな身体を、どうか慰めて。これはご主人様しかできないことなの。お願いよ」

抱え上げられるのをドキドキしながら待っていると、恋人の秀一の声が聞こえた。

「ぼくのさやかが……ぼくには絶対にくれなかった処女をあんなヤツに喜んで捧げただけじゃなく、また抱かれようとしているなんて……しかも、あんなに媚びた声と目つきで同時絶頂をせがみながら、自分から抱かれるポーズになってるなんて……」

彼にとっては、アナルセックスをするときに、ショーツを下ろしてお尻を突き出される仕草と同じだった。恋人が自分と交わろうとするジェスチャーを、他の男、それも悪党に向かってされるのには男として、敗北感と喪失感を覚える。

「シュウくん……」

さやかは胸を突かれた心地だった。

しもべに堕ちて淫乱かつ怪人にメロメロになっているのを除けば、性格も記憶も変わりない。

彼を好ましく思う気持ちは消えていないし、性行為をしたことに後悔はなかった。だからこそ、他の男に乗り換えたことへの後ろめたさがあるが、止まるつもりはない。

「はあ……はあ……今更だけど、さやかはまた、他の男の子と……ご主人様と、シュウくんの前でセックスしてしまうんだわ……しかも、彼と何度もしたアナルセックスを」

秀一の態度には、なんとも興奮させられた。彼ではなく、ご主人様に抱かれようとしている実感が強くなり、性行為への期待が高まって、カラダが淫らに熱くなるのだ。

「元カレに、オレたちのラブラブぶりを見せ付けてやるぞ」

「うん。さやかも同じ気持ちだよ。シュウくんのよりもずっとずっと大きくて硬いご主人様の巨根チンポで、さやかのケツマンコをいっぱいほじって、気持ちよくイカせて欲しい、はあ、はあ、ご主人様も熱い精液を気分よくたくさん出して。さやかのケツマンコはもう自分のモノだということを、元恋人の彼に思い知らせてあげてね」

ご主人様の心中を察して、秀一をまっすぐ見ながら、聞こえる声でおねだりする。

聞かされた秀一は肩を落とした。

「うぅ……将来ぼくがもらうはずだったさやかの処女を、あんなヤツに横取りされただけじゃない……代わりにしていたアナルセックスにしても、まさかさやかが、あんなにも幸せそうにするだなんて……恋人を寝取られた気分というのは、こういうものなのか……」

女子にモテモテのメガネハンサムは、すっかりうちひしがれている。
「ククク……いい光景だ」
悪趣味で、オンナを略奪するのが大好きな怪人の勃起は、一段と硬くなる。
さやかの攻略法を考えるために、隠し撮りして鑑賞した彼と彼女の性行為の様子を思い浮かべ、性欲剥き出しの今の姿と比べると、オスとしての下品な優越感で、巨根はどうしようもなく熱くなった。
分身がはちきれんばかりに膨れあがる中、彼女をM字開脚の体勢で抱え上げる。
先ほどももかを抱いたときと同じ、いわゆる背面駅弁だった。
「うふ、ご主人様の鍛え上げた男らしい肉体に抱き上げられるのは、何度してもらっても素敵だわ。優男のシュウくんには与えられたことのない幸福感だよ。これから優秀なオスにセックスしてもらえることに身も心も喜ぶからね。あぁ、オマンコが熱いよぉ」
怪人の分厚い胸板に華奢な背中を預けながら首を巡らせ、親しげに彼を見上げる。
「オレも、体格差と肉体の逞しさの違いを思い知らせる体位は大好物でな。その点で、チビでグラマーなももかは最高だが、さやかも悪くない。女にしては背が高いが、オレより低くおまけに細い。しかし、スタイルはなかなか。ヤリ甲斐は甲乙つけがたい」
「あン、本音なのね。さやかの肛門に当たってる先っぽ、すごく熱くなってる」

淫乱な顔で微笑する。元恋人の幼馴染みには見せたことのない深く陶酔した顔で、

「体格差を思い知らせて、なにより、元恋人以上のチンポの威力を刻みつけながら、ケツマンコを食い散らかしたいって、叫んでる」

「その通りだ。さぁ、入れるぞ」

「待ってたよ……んっ」

ご主人様の巨根は、ももかに出した精液でヌルついていた。

経験豊富なさやかの肛門がほぐれているのも手伝って、挿入はスムーズだ。

先ほど、おねだりされた上でさやかの処女を散らした亀頭の先は、なめらかに摩擦しながら肛門を割り、肛門管を抜けて、直腸も広げていく。

「はあぁっ……来てるっ……ご主人様のおっきすぎるチンポが、さやかのケツマンコの深いところまで入ってるぅ」

高いカリ首が直腸を力強く抉る。熱く太い竿は脈動しながら、粘膜を目一杯伸ばして、自分の形に固定していく。

「ふぁぁあっ……シュウくんが届いた最高記録を軽々抜いて、あああ、ずっと奥まで届いてるのぉっ」

やがて赤銅色の巨根は根元まで収まった。

怪人はその証拠にクイクイ股間を突き上げ、鍛えた下腹でさやかのなめらかなお尻を押し上げる。彼女は悦びも露わにあえぐ。

「すごいよぉっ、はあ、はあ、ケツマンコが限界まで広がってるこの感じイイのぉ、ああっ、はぁっ、シュウくんの禁欲した後で最高に熱かったオチンチンよりも、もっと熱くて硬いご主人様チンポの感触が、粘膜に染みこんでくるこの感じもイイっ」

さやかは甘く媚びた声で性欲に満ちたことを言う。

「ねぇ、ご主人様ぁ、動いて、ねぇ、動いてぇ、さやかはド淫乱のド変態だから、元恋人のよりも男らしいチンポをケツマンコに入れられただけじゃ、満足できないのぉ、ズリズリ擦ってもらって、奥にいっぱい熱いのを出してもらいたくて堪らないドスケベなのっ」

情欲に潤んだ瞳で哀願する。怪人はさらに楽しむためだけにゲスな質問をする。

「オレのデカチンは、知っての通りヤリチンでもある。そんな穢らわしいチンポが、美人で優等生、生徒会長の大本命であるお前の性欲を……しかも、元カレの目の前で、満足させてしまってもいいのか？」

「もちろんだよ、ハア、ハア、ご主人様だけが、さやかを満足させてくれるんだから、ン、はやく奥に熱いのをちょうだい、たっぷり流し込んで、思い切りイカせてよぉ」

「うぅ……さやかぁ……」

予想以上に必死で、だからこそ本気だとわかる言葉を放つさやかの様子に、秀一がまたもや絶望した顔になる。

さやかの媚びた哀願も、秀一の敗北感に満ちた様子も、怪人には小気味よかった。

彼の勃起はさらに漲り、暴れるみたいに根元から跳ね回る。

お遊びに満足した彼が性交を始めようとしたとき、ももかが口を挟んだ。

「ちょっと待って！　ももかがお手伝いするよ～」

アナルセックスでイキ疲れて、お尻を上げて突っ伏していた彼女だが、持ち前の元気さで復活していた。

壇上に残っていたパイプ椅子に上って、背の低さを補っている彼女は、

「貪欲ドスケベなさやかちゃんのワキを、また可愛がってあげまーす」

「いいだろう。そこは、元カレが手をつけなかった場所。たっぷり感じさせて、ももかも元カレから、さやかを寝取ってしまえ」

「わぁ、ドキドキしちゃう……あとでご主人様が記憶操作したから秀一くんは覚えてないけど、ももかはピンクのとき、さやかちゃんから秀一くんを寝取っちゃったんだよね。今度は、その男の子からさやかちゃんを寝取るなんて、ももかはなんてオトナなんだろ」

「そういうオトナはダメだよ、ももかちゃん、んっ、よいしょ……はい、ワキをどうぞ」

たしなめるさやかだが、両腕を上げて前腕を頭の後ろに固定するポーズをして、ワキ責めをねだる。
「やったぁ。さやかちゃんのワキって、綺麗で感じやすくて反応がよくて、いい匂いがするし、舐めたり吸ったりするときの感触もいいから大好き！　チュッ」
ピンクは差し出された腋の下に口を突っ込み、愛情を込めてキスした。
「ひぁぁっ、も、ももかちゃんのワキキスぅ、んんぅ、気持ちいいぃっ」
「ペロペロ、ぶじゅ、ほじ、ほじ、チュ、チュ……あは、さやかちゃんのワキったら、始めたばかりなのに、いやらしくヒクヒクしてるよ。ほんとエッチで可愛いんだから」
舐めて、吸って、舌先でくぼみをほじって、キスの雨を降らせる。
感度がいい上に素直に喜びを表現する腋の下に、ももかはますます欲情して、さらに熱っぽく可愛がる。
「はああっ、ももかちゃんにワキを可愛がられるの気持ちいいっ、ンン、シュウくんがちっとも気付かなかったさやかの好きなところを、その調子でもっと感じさせてぇ」
さやかのカラダはしきりにくねり、夏服ブラウスやスカートの裾がヒラヒラ揺れた。
腋の下にはひっきりなしに性感が湧いている。愛撫されるワキはどんどん熱を持ち、汗をかいて、発情したオンナの芳香が漂っている。

「そら、ケツマンコも気持ちよくしてやる。オラ、オラッ、元カレのチンポから乗り換えた、悪の巨根に感じろっ、元カレとやりまくったケツマンコを、ヤツの前でデカヤリチンでほじられて、ヤツに聞かせなかったエロメス声を張り上げろ！」

怪人は激しく腰を振った。

元恋人の秀一と尻穴性交を頻繁にしていただけあり、彼女のお尻はこなれている。

おまけに物語の幕間では、怪人が徹底的に開発し直した。

だからこそ怪人は最初から、再開発中に把握した範囲――痛みを感じさせず、同時に傷つけないギリギリの力強さで容赦なく責め立てる。

「はああっ、ひぅうっ、ご主人様のチンポにケツマンコほじられるのイイっ、んんっ、ひぁあっ、シュウくんの届かなかったずっと先までゴリゴリ抉られるの、気持ちいいのぉ」

カラダのなにもかもを見透かされているさやかは目尻を垂らし、奥歯が見えるまで口を開けて、甘く甲高い声でよがる。

「ぺろっ、ぺろっ、もう、さやかちゃんってば、れろれろ、気持ちいいのはお尻だけなの？　ご主人様チンポで掘られてるケツマンコだけじゃないでしょ？　じゅるるっ」

ももかが言葉で責める。不満を込めて、これまでよりも強く腋の下を吸い、今まで以上の性感を味わわせると、さやかは嬌声を張り上げた。

「ひーっ、ごめんなさいぃ、ひぃーっ、ももかちゃんに可愛がられてるワキも、すごく気持ちいいよぉっ、ひあぁぁっ」
気圧されながら、一生懸命褒め称える。
「オラ、もっと言えさやか。ご主人様とのケツマンコセックス、シュウくんとするより気持ちいい、さやかは同性にワキを可愛がられてよがるドスケベなのってな」
ご主人様が命令すると、しもべのさやかは従順に実行した。
「ご主人様とのケツマンコセックス、シュウくんとするより気持ちいいよぉ、ひあぁぁっンン、さやかは、同性のももかちゃんにワキを可愛がられてよがるドスケベなのっ」
恋人を傷つけると同時に自分を貶めるセリフを甘ったるく口走る。
「あああっ、気持ちいいよぉ、ンン、チンポが小さくてぇ、セックスが大したことのないシュウくんじゃなく、チンポがすごくて、セックスの上手なご主人様とぉ、大好きなももかちゃんと一緒にセックスしてる実感が強くなってぇ、堪らなく興奮するのぉっ」
変態的なセリフを口にすればするほど彼女は昂ぶった。
真っ赤な顔に細かい汗をかき、元恋人の見たことがない蕩け顔になっている。
「うあああ……さやかが……さやかが……」
秀一がうなだれる様子に、悪趣味な怪人は汚く笑った。

他人を踏みにじって得る優越感と、いいオンナを寝取ったのを元恋人に見せ付ける快感を、もっと高めて貪りにかかる。

「さやか、キスするぞ。ベロ出せ。とびきりスケベなキスをしながら、元カレの前でラブラブ絶頂しようぜ」

「うん、ご主人様……べぇぇぇ……はふっ」

さやかは従順に、桃色の舌を長く伸ばした。

怪人は顔を寄せて、唇で挟む。そのまま吸い上げながら口元を近づけ、唇を重ねた。

「ぶちゅぅぅ……はぁ……さやかのベロは、綺麗なだけじゃなく味が甘い。オレのベロと同じものとはとても思えない。唇もそうだ。こんな口とチューできるなんて、オレは幸せ者だぜ、ぶちゅっ、ぶちゅっ、れろれろ、おいさやか、元カレとも数え切れない回数キスしてたんだよな。オレとヤツ、どっちがいい？」

「ちゅっ、んんっ、チュ、チュ、断然ご主人様だよ、んんっ、遥かにいやらしく唇を刺激して、舌を絡めて、お口の中を舐め回して、んんれろれろ、調教されているときにしつこく開発されたから、もうお口も、すごく敏感で貪欲になってる、はあ、はあ、気をつけないと食事するときも、イクんだから」

「ケツマンコも同じだよな？　元恋人とヤってる間は、そんなことはなかったんだろ？」

「うん……でも、女の子にそんなことまで言わせないでよ……バカ……ちゅっ」
「さやかぁ……」
イケメンで女子にモテモテの秀一は、半べそをかいている。怪人は追い打ちをかけた。
「そうだ、秀一。言い忘れてたが、オレは狗勒統だ」
「……なんだって？」
「ふんっ」
怪人は変身を解いて正体を現す。
ツンツン頭で、目元に黒いマスクだけをつけた裸の怪人は、スキンヘッドの男子校生になった。肉体は相変わらず裸だが、幼い頃から鍛えた身体は、男臭くて筋骨隆々。怪人の超人的な力がなくても、さやかと背面駅弁する体力は有り余っている。
「なっ……ななな、なんてことだ……よりによって正体がコイツだったなんて……！」
するとさやかは、
「え、正体を見せてしまっていいの？」
「問題ないぜ。全員しもべにしたら記憶操作する。面倒がないようにな」
怪人は男子校生狗勒統として喋る。秀一はまたもやショックを受け「そんな」と呻く。
狗勒統がろくでなしなのはさやかも知っており、ハッキリ「嫌い」と言っていた。

それなのに、あんなに親しくお喋りして、セックスを続けるだなんて。
「あああああ！　さやかが……ぼくのさやかが……狗勒統なんかに、寝取られたぁっ」
秀一はショックのあまり頭を抱えた。
「さやかは狗勒統なんかに、ぼくには絶対くれなかった初めてを捧げた……しかもあんなに熱烈にだ……それに、ぼくとするキスやアナルセックスより、あんな奴とする方がずっといいと断言した……」
その場にへなへなとしゃがみこむ。
「さらには、ぼくと性交渉していたときよりも遥かに幸せそうな蕩けた表情をして、あんなにもハレンチに乱れまくった……さやかの身も心も奪われたとしか……完璧に寝取られたとしか言いようがないじゃないか！　くそ！　くそ！　よりによってあんな奴に……さやかもハッキリ嫌いと言っていた、あんな最低な男なんかに！」
彼は悔しさのあまり、床を転げ回る。統は高笑いした。
「ハーッハハ！　無様だな秀一。ようやく現実を受け止めたか。メガネイケメンもこうなっちゃおしまいだぜ……オラさやか、元恋人の前で、もっとベロチューしようぜ。正体を現したんだ。これからはオレのことを統と名前で呼べ」
統が命令すると、元恋人の無残な姿を気の毒そうに見ていたさやかは、

「うん、統……ごめんね、シュウくん。見ていた通りさやかはもう、統のカノジョなの。ムチュ、れろれろれろ」
「へへ、オレのベロを舐めたり、吸い付いたり、口の中を舐め回したり、べろべろ、ツバを飲むのに、躊躇いがないな。気持ちよさそうに、美味そうにしてやがる」
「んふ、だって、さやかはもう統のカノジョですもの、れろれろ……コクン……ちゅぷっ、チュパ、はああ、統とのベロチュー、最高に気持ちいいよ、はああ、折角、統とこんなベロチューできるのに、もう恋人じゃないシュウくんに構うなんて馬鹿らしいわ、はあ」
さやかは完全に吹っ切れていた。
元恋人の目の前でしているとは思えない熱烈さで舌を使い、口の周りを唾液でベチョベチョにしている。小鼻を膨らませ、心地よさそうに鼻を鳴らしては、満足の熱い吐息をこぼしていた。
「ぷちゅ、れろっ、れろっ、これからケツマンコに中出ししてやるが、その間も休むなよ、さやか。おい、ももか、お前もワキでさやかをたっぷりイカせてやれ、はむっ、んむっ、オナニーは禁止だ。今は、オレとさやかがラブラブなのを強調するところなんだからな」
「むぅっ、さやかちゃんとはベロチューするなんて不公平だよ！　ももかだって、ベロチューしながらケツマンコでイキたかったよッ！」

「お前はチビだから、この体位でベロチューするのは無理だろうが。キスハメはあとでたっぷりしてやるから、今はさやかのワキに集中してろ」

「やったぁ、約束だからねっ！　じゃ、さやかちゃんのワキを、れろれろれろれろっ」

不満も露わに頬を膨らませたももかだが、すぐに機嫌を直し、嬉しそうに舐め始めた。

三人はラストスパートをかける。

「オラ、さやかイケ！　鼻つまみ者の狗勒統のチンポにケツマンコ掘られながらベロチューして、元カレが届かなかった深いところで精液もぶっぱなされて、おまけに同性のももかにワキを可愛がられてイケ！」

「ぺろぺろ、イ～ケ、イ～ケ、さやかちゃん、イ～ケ、イ～ケ、元恋人の秀一くんの前で、他の男の子のモノになった証を見せ付けながら、イ～ケ、イ～ケ、ぶちゅ、ぶちゅっ」

「ンひーっ、さやかのケツマンコイっちゃうっ、シュウくん以外の男の子の、愛する統の彼より立派なチンポでイッちゃうのっ、ひあぁぁっ、同性のももかちゃんにワキ全体を吸われて、くぼみを舌先でほじられながらイクぅッ！」

ほどなく統は射精した。ももかのときみたいに、根元まで埋め込み、さやかのお尻の柔らかさを下腹いっぱいに感じながら、寝取り快感で濃縮された間男精液をぶちまける。

ドビュンンンッ！　ドビュルルゥゥ！　ドブビュブルゥゥウウゥ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

元女騎士は新人スパイ♡

先輩エルフと淫乱オークの館潜入ミッション

性豪オークの極悪性具を奪い取れ!!

クビになった元女騎士はスパイになっても カラダを駆使して世を正す!?

悪徳上司を殴り飛ばしてしまった正義感の強い女騎士、コハクは騎士職をクビにされてしまった。そんな彼女が誘われたのはスパイの採用試験で……。自分の力を世のため人のために使いたいコハクはスパイ採用試験を受験し、処女を犠牲に合格をつかみ取る。彼女に与えられた初ミッションは、相棒となった人妻エルフとともに悪い噂がつきまとう豪商オークの館に潜入するというもの。性豪オークを闘しきり、女の武器を使って違法性具を奪い取れ!

【小説】木森山水道
【イラスト】凪丘

各電子書籍サイトにて好評配信中!

電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場!

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録! ボリュームたっぷりでお送りします。

闘うことを強いられた女騎士フェネス!

闘技場で繰り広げられる気高き女騎士の陵辱ショー!

プリズンアリーナ

the legend of prison arena

地獄の剣闘士

小説:ウナル イラスト:かにばさみ

聖騎士がソープ嬢に転職!?

エッチの腕を磨いて魔王暗殺を目指すTS英雄譚!

女体化聖騎士セレス

[性奴隷、性おやじ、魔王暗殺作戦]

小説:木森山水道
イラスト:河野雅夫

株式会社 発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 コトブキコウビル TEL:03-3535-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報はオフィシャルサイトへ キルタイムコミュニケーション 検索